がん研有明報告

加納陽介

早くも大都会東京での生活が三か月経過した。朝五時半起きの自転車通勤にもなれてきて、だんだんと朝起きる時間が遅刻ギリギリになってきた今日この頃である。それにしても新潟と異なる東京の暑さと家賃の高さが身にしみる。

私は今、住み慣れた新潟を離れ日本で最も多く消化器外科手術をこなしている「がん研有明病院」で胃外科レジデントとして研鑽中である。「がん研」は、消化器外科医数六十人、その内胃外科十六人、そして胃外科の手術数は年間約七百件、その内腹腔鏡下胃切除は五百件という、外科医の数も症例数もとんでもないハイボリュームセンターである。

先ほどの手術件数を聞いた新潟県の外科医であれば、私がこの三か月間ですでに多くの手術を執刀していると思うかもしれない。そして、若手の外科医であれば、減少傾向の胃癌の手術がいっぱいできてなんて羨ましいところにいるのだと思っているかもしれない。しかし、今現在私の胃癌の執刀数は…ゼロである。「えっ!?」と思った人も多いと思うが、がん研の胃外科では約一年は術者は回ってこないのが現状である。よく考えてみれば、医局の関連病院ではない「がん研」では、スタッフにとって来ているレジデントはまったく素性の知れない未知人間であり、そんな人間にそうやすやすと術者をやらせるわけにはいかないのが当然である。その一方で、半年や一年という短い出張期間で、あれだけ多くの執刀をさせていただいた新潟県の環境が逆に凄いのではないかと感じている。本当に私を指導していただいた先生方に感謝である。

現在「がん研胃外科」は六人のスタッフと十人のレジデントで構成されている。レジデントというのは、新潟でいうのであれば「出張医」にあた

胃外科のレジェンド佐野武先生と

るが、医局の関連病院ではない「がん研」では出身大学、所属医局が同じ外科医は誰一人もいない点が大きく異なる。また、現在のレジデントは、卒後八～十四年目であり、同世代の主に上部消化管を専攻している外科医と一緒に働けることは、今後の人生において非常に有意義であると感じている。この関係が今後の胃癌治療に貢献するものとなるかは、今後のお互いの頑張りにかかっている。

「がん研」には、著名な先生方が大勢在籍している。外科同門の大橋学先生もその内の一人であり、同門の先生が「がん研」のような日本有数の施設で活躍している姿をみていると自分も頑張ろうという気がわいてくる。また、「がん研」には胃外科のレジェンドである佐野武先生が在籍している。佐野先生の知識量と頭のキレを目の当たりにするだけでも「がん研」に来たかいがあったと感じている。ともに手術をさせていただくこともあるのだが、レジェンドの手術は無駄がなく、ゆったりとしながらも迅速に手術が終わっていく。一回目の前立の時はあまりの緊張に結紮が緩み出血をきたすという失態を犯してしまった。

まだ三か月ではあるが、新潟を離れることで文化や風習の違いを知ることができて非常に刺激的な日々を送っている。「がん研」で学んだことを新潟にフィードバックさせられるように頑張っていきたいと思う。

最後になりますが、この様なチャンスを下さった若井教授を始めとして新潟の医局員の方々、「がん研」の比企直樹先生、大橋学先生、そしてほぼ母子家庭のような状態に耐えている妻と娘にこの場をかりて感謝いたします。

（平成二十一年入会）